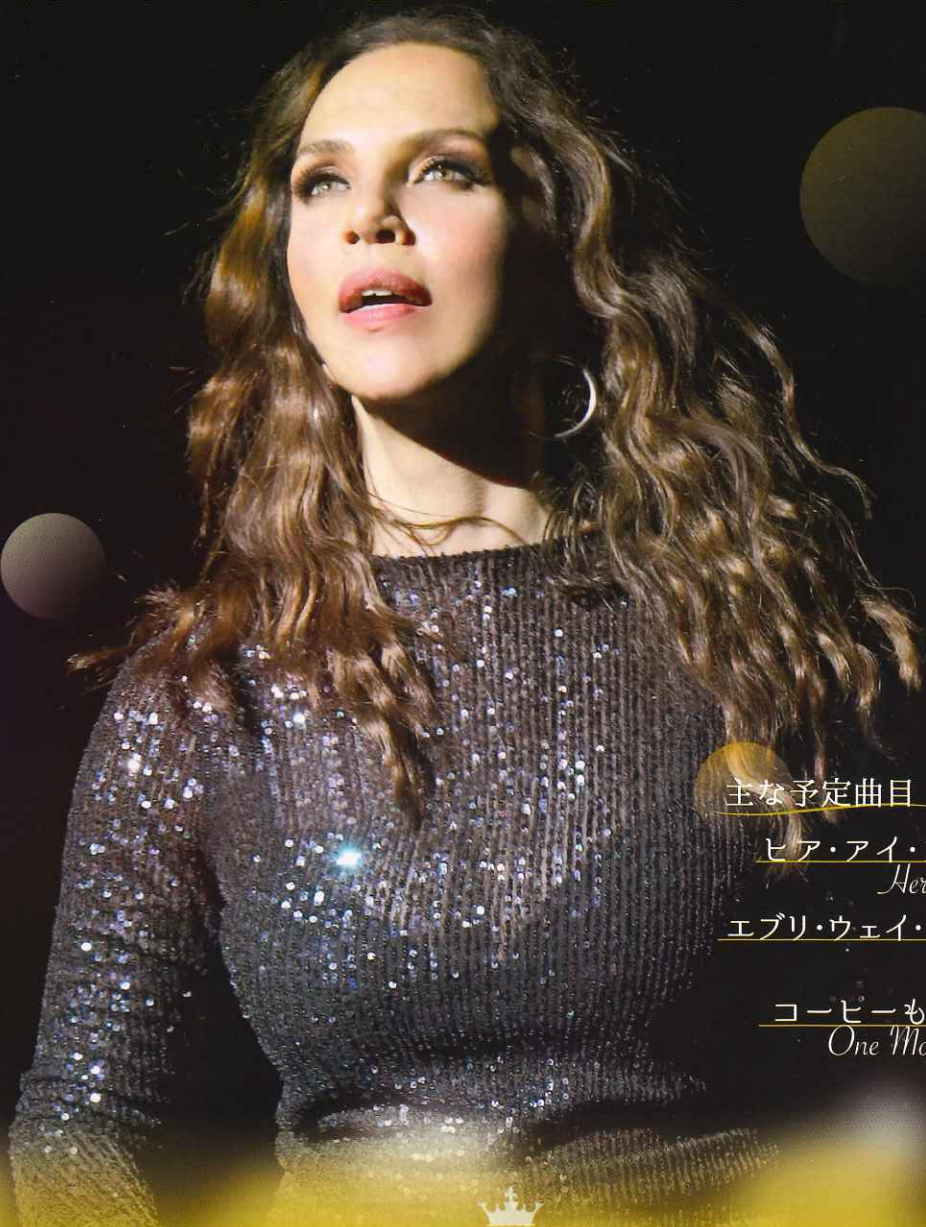


S E R T A B E R E N E R



主な予定曲目

ヒア・アイ・アム
Here I am

エブリ・ウェイ・ザット・アイ・キャン
Every way that I can

コーヒーもう一杯
One More Cup of Coffee

さくら 他

民音創立60周年記念／トルコ建国100周年記念

セルタブ

ジャパン・ツアー2023

トルコ・ポップスのスーパースターが来日！

公演日程(2023年)

10月16日(月) 6:30p.m. 文京シビックホール 大ホール
10月17日(火) 6:30p.m.

入場料金：S席 ¥7,000 A席 ¥6,500 (税込) ※未就学児童の入場は固くお断りいたします。

チケットのお求めは

チケットぴあ <https://t.pia.jp/> [Pコード：244-838]

ローソンチケット <https://l-tike.com/> [Lコード：75902]

CNプレイガイド ☎0570 (08) 9999 (全日10:00~18:00)

公演のお問い合わせ：MIN-ONインフォメーションセンター ☎03 (3226) 9999

主催：MIN-ON 後援：外務省／トルコ共和国大使館

7月12日(水)
発売開始！



トルコ音楽の底力を見せつけるセルタブ

今年(2023年)はトルコ共和国の建国100周年。友好国日本での祝祭コンサートにふさわしい歌手として、セルタブが選ばれたのは当然だろう。トルコは古今の様々なジャンルの音楽が混在し、相互影響してきた音楽大国である。オスマン帝国時代の宮廷で演奏されていた古典音楽、それが大衆歌謡化したサナート、労働者階級向けの演歌アラベスク、民謡を土台にしたハルク、そして欧米ポップスの影響下で1960年代に生まれたターキッシュ・ポップや、近年のクラブ・ミュージックにヒップホップ等々。いずれも、民族の長い歴史と複雑に入り込んだ重層的文化のエッセンスを取り入れつつトルコ独自の発展を続けてきたわけだが、そうした音楽全体を咀嚼し、現在進行形のポップスとして表現してきたのがセルタブである。リッキー・マーティンとラテン・ポップスをデュエットしたり、ジャズ・アルバムやクラブ対応のリミックス・アルバムを出したり、モーツァルトのオペラ作品を歌ったり、古典音楽に真正面から取り組んだり…と、これほど幅広い領域を自在に横断しつつ、しかもトルコ民族の魂をストレートに感じさせてくれる歌手はほとんどいないだろう。

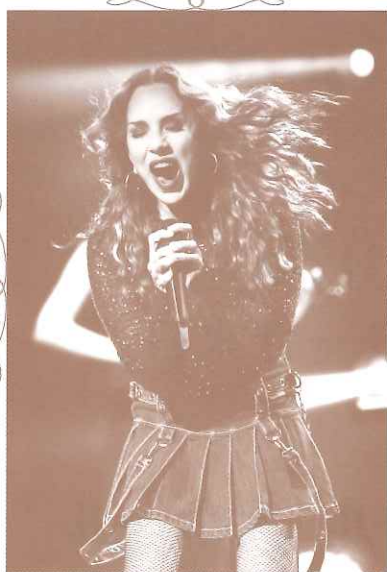
「大事なのは、“自分の個性としてのトルコらしさをしっかり出すこと”、そして“自然な感情表現”だと思っている」と、2004年の初来日公演の際のインタビューで私に語った彼女は、ステージ・パフォーマンスについてはこう続けた。「ダンスが特にうまいわけじゃないけど、ステージに上がると変わるの。歌っている時のからだの動き、ボディ・ランゲージで表現するところがあると、よく言われる。その動き全体が人を感動させたり、特別なエネルギーを発したりしている、と。歌っている時はよく目を閉じているんだけど、その時は音符とかいろいろ浮かんでくる。ある意味、瞑想しているような感じね」

圧倒的歌唱力と身体全体で観客に訴えかけるソウルフルなステージ・パフォーマンス。セルタブの日本公演は、音楽大国トルコの底力を我々に見せつけてくれるはずだ。

松山晋也 (音楽評論家)

セルタブ・エレネル

SELTAB ERENER



1964年、イスタンブールの芸術家一家に誕生したセルタブ・エレネルは、音楽大学でクラシックの声乐を学んだ後ポップスに転向した。トルコ音楽界を代表する女性歌手セゼン・アクスのバックアップを受けて1992年に『Sakin Ol!』でアルバム・デビュー。以後、昨年の『İyiliğe Ninniler』まで、正式なスタジオ録音アルバムとしては計13作品(他にベスト盤やライブ盤、リミックス盤なども多数)を発表し、そのほとんどがベスト・セラーとなっている。1990年代末からは世界市場にも進出開始。1999年、ラテン・ポップスの大スター、リッキー・マーティンとのデュエット・ソング『Private Emotion』を発表。2003年にはユーロビジョン・ソング・コンテストに参加してトルコに初めてグランプリをもたらし、また、英語で歌った『No Boundaries』も日本を含む世界中でリリースするなど、名実共にトルコのトップ・スターとしての地位を固めた。その功績は、高校の社会科の教科書でも紹介されているほどだ。トルコの古典歌謡から英語によるロックやジャズまでを圧倒的歌唱力で表現し、現在もトルコ・ポップス・シーンを牽引し続けている稀有な才能である。